

9 高次脳機能障害を伴う視覚障害者への時間管理支援とその結果

国立函館視力障害センター指導課 渡邊純代 竹花治美 小坂瑞穂
久保明夫 澁谷公平 山田信也
泉徹 花田原樹 稲田道子

【はじめに】 国立函館視力障害センターにおける生活訓練課程では、近年高次脳機能障害を伴う視覚障害者の受入れを行ってきた。本発表は、高次脳機能障害者に3か月間、時間管理を主に支援した内容とその結果、及び地元「コロポックル」への連携までの実施報告である。

【対象者】 25歳、女性。脳腫瘍による視神経萎縮、高次脳機能障害、軽度の右片麻痺。視力は、右0.05(0.2)、左：0。視野は測定不能である。

【経緯】 平成9年4月受傷。盲学校を経て、平成15年10月～16年9月まで当センター生活訓練課程に入所。歩行やパソコンなどの訓練を繰り返し行うことで技術の定着を図るが難しく、訓練の開始時間もルーズな点が多く見受けられた。また18時以降の寮生活は、ヘルパーにより管理された生活を送ってはいしたが、自己管理は不可能であった。退所後北海道大学病院で半年間高次脳機能障害の検査入院、通院の後、平成17年5月から再度生活訓練課程入所に至る。

【方法】 北海道大学病院の担当医師や作業療法士、また本人及び家族と相談し、以前の生活訓練の反省をふまえ、「時間管理」をメインに訓練し、生活訓練の訓練科目(歩行やパソコンなど)は時間管理のための手段としてとらえ、支援を実施することにした。具体的な実施内容としては、①毎日チェックリストを作成し、朝にスケジュール確認、夕に1日の生活の内省報告を行う、②内省報告の反省や不安点について一緒に解決策を探し実行する、③毎日の日記記入、④訓練に遅れず参加するためプログラム編成などの工夫を行ったり、場合によっては一定時間以上遅れたら訓練を中止するなどの規制を行う、⑤ヘルパーの協力を得て、18時以降の生活場面における1週間毎の小目標を作成したことなどである。

【結果・考察】 具体的に変化が見受けられた内容としては、①ICレコーダーで時間割を確認する以外に、毎日の時間割を書いて認識することで、記憶の定着が高まった ②生活動作(ハブラシや入浴)にかかる時間を意識し、効率性を一緒に考えることで、一般的な時間が定着した ③毎日日記を記入することで、文字の形を思い出し実際に文字として書く、という一連の流れの定着が深まり、月日や曜日の時系列も意識化された ④プログラム編成などの工夫により遅れない環境を得、さらに規制を加えられることで一層時間に関心が高まり、訓練に遅れる割合が減った ⑤ヘルパーと一緒に努力し喜びを分かち合うことを知り、例としては以前まで歯磨きは30分程度行っていた(きれいになったと分かっても、やめられなかった)のが、「歯磨きは10分」という小目標を立てることで、最終的には10分前後で定着した。

また、訓練修了後、支援員が「コロポックル」を訪問して情報提供を行った。今後も各機関と連携し、必要な支援をしていきたい。